

佐伯泰英外伝【八】 スペインの師匠はボヘミアン

重里徹也
(毎日新聞論説委員)

佐伯泰英は一九七一年から七四年末までスペインに滞在した。この間にさまざまな人たちと知り合った。中でも特筆すべき存在は、七三年に知り合った永川玲二だ。

まず、永川のプロフィールを紹介しよう。彼は若き佐伯に少なくない影響を与えたのではないだろうか。永川の著書と新聞記事、親族や親交のあつた人たちがネットに書いている記述を参考にする。

永川は一九二八年、鳥取県米子市生まれ。四五年二月に広島の陸軍幼年学校を脱走し、終戦まで全国を逃亡したという。それが後に丸谷才一(一九二五—二〇一二)の小説「枕まくら」の題材になつたという記述が複数読める。ただ、このことに関して丸谷と親しかつた人たちに尋ねると、否定的な言葉ばかりが返ってきた。あるいは、丸谷が作品を発想



スペインに渡った佐伯は写真家として闘牛を追いつづけた

写真/佐伯泰英事務所提供

するきっかけの一つになつたということかもしれない。

『鎌まくら』はとても面白い小説で、丸谷の代表作の一つといつてもいいだろう。徴兵を忌避した男の戦中と戦後を描いた名作だ。私は生前の丸谷と話す機会はいくらでもあつたので、この作品と永川との関係を丸谷本人に確認しておけばよかつたと悔やまる。その時には、自分が永川玲二について文章を書くなんて、思つてもいなかつたのだ。

東京大英文科を卒業後、東京都立大（当時）助教授などを経て、一九七〇年からスペインのセビリアに定住した。九九年度に福岡県の北九州大で客員教授を務め、二〇〇〇年四月に滞在していた東京都新宿区内で虚血性心不全のために死去した。

永川が都立大で助教授をしていたころに助手をしていた川成洋（元・法政大教授）による文章がネットで読め、当時の永川について詳しい（記された日付は二〇一一年二月になっている）。

これによると、永川は一九六〇年代末に、「ジャテック」（反戦脱走米兵援助日本技術委員会）のメンバーに加わり、ベトナム戦争反対の市民運動をしていた。小田実らの「ベ平連」（ベトナムに平和を—市民連合

と近い関係の運動組織だつたらしい。永川は自宅でも脱走米兵をかくまつっていた。この脱走兵はジョン・フィリップ・ロウという名前で「わかれが歓呼して仰いだ旗」という脱走兵を描いた小説を文芸誌「すばる」（集英社）に連載している。翻訳は永川がした。

当時は大学闘争の真っただ中という時代で、都立大でも大学当局の要請で、機動隊が大学構内に突入するという事態になつた。永川ら十人足らずの教員は学内を占拠していた学生に退去するよう呼びかけ、自分たちが機動隊の前にピケを張つたが、即刻排除されたという。永川は大学に抗議して辞表を提出し、日本を出てスペインに住む道を選んだらしい。

永川は英文学者であり、一般的にはジェイムズ・ジョイスの小説「ユーリシーズ」を丸谷才一、高松雄一とともに訳したことで知られているのではないだろうか。

検索すると他にも、シェイクスピア「ハムレット」、E・ブロンテ「嵐が丘」、アラン・シリト「土曜の夜と日曜の朝」、グレアム・グリーン「情事の終り」、V・S・ナイボール「神秘な指圧師」など、たく

さんの訳書が出てくる。

私が入手した永川の本は二冊だ。永川自身の著書はこの二冊だけなのではないか。

一つは「ことばの政治学」（岩波書店・同時代ライブラリー）。抜群に面白いエッセイ集だった。言語を通して世界のあり様を見つめ直す本といえればいいだろうか。

ベルギーにおけるオランダ語（フランドル方言）とフランス語（ワロン方言）のせめぎ合い。少数民族に対する多数派の言語的抑圧。英語の影響を受けてフランス語が変化していること。スタンダードが英語にかぶれた理由。フランス語のへたな精神科医が、パリで人気があるのはどうしてか。

テーマは言語の諸相をめぐって国境や時間を超え、広がっていく。二人（永川自身とその友人という設定だろうか）が対話する構成になつていて、とても読みやすい。ぐいぐいと引き込まれるうちに、解放感を感じている。自分もいつのまにか、言葉と人間の関係について、民族を超えて、いわば地球市民のような立場で、考えを深めているのだ。文章の

背後にあるジャンルを問わない博識と人間を眺める温かいまなざし。これを書いたのは一体、どんな人なのだろうと考えてしまう。

もう一冊は「アンドルシア風土記」（岩波書店）。三千年にわたるイベリア半島史をたどり、アンドルシア地方（スペイン南部）の起伏に富んだ文化を浮き彫りにしていくエッセイ集だ。グアダルキビール川の河口の都市タルテソスは旧約聖書に登場する。その後、このヨーロッパ最南部の地域は、古代ローマ帝国や西ゴート王国（ケルマン系の王国）、ウマイヤ朝（イスラム帝国の一つ）の支配を経て、レコンキスタ（キリスト教国による国土回復運動）、スペイン王国の誕生、コロンブスらの大航海時代へとめまぐるしく時代を駆け抜けしていく。

なんだか、高校の世界史の授業を思い出すような紹介になつてしまつたが、いかにこの土地が人類史の十字路になつていたかがうかがえる。永川の筆致はわかりやすいが、内容は濃く、細部にいくつも読ませどころがある。こちらも並々ならぬ蓄積を背後に感じさせる一冊だ。

佐伯泰英が永川玲二と知り合ったのは一九七三年二月のことだ。バルセロナ時代の友人の紹介で、一家でセビリア市内にある永川の自宅を訪ねた。永川は団地に住んでいたが、二枚の越中ふんどしが干してあつたのをよく覚えているという。

永川は終生、独身だった。佐伯は、

「純粹で、でも、めちやくちやに頑固な人でした。ボヘミアンといえば、ボヘミアン。自由人といえば、自由人。無頼漢といえば、無頼漢。若い人の面倒見がよくて、ひつきりなしにヒッピーのような連中が寝泊まりしていました」

と話す。永川の話を始めると楽しそうな表情になる。佐伯が暮らすアスナルカサ村は永川の住んでいるところから約二十八キロ。始終会つていたわけではないけれど、長い付き合いになつた。

「当時、セビリアにあまり日本人がいなかつたのですね。数組、暮らしていたでしようか。うちに風呂がなかつたので冬などお湯をもらつたり、逆に永川さんが若い人を連れて遊びに来ることもありました。ダンボールで麻雀パイを作つてきたのには驚きましたが」

英文学者の永川だが、関心は広く、当時はポルトガルの詩人、ルイス・デ・カモンイスや海洋文学史を研究していた。

佐伯は永川を「スペインの師匠」「もの書きの大先輩」と呼ぶ。とにかく博識。部屋には英語、スペイン語、フランス語など多彩な言語のおびただしい数の本が乱雑に置かれていた。家具はほとんど、どこかから拾つてきたか、自分で作つたものばかり。室内は汚いなんでものじやなかつた。

「生のイワシやサバ、マグロなどを食べさせてくれるのですね。ハエがブンブンたかっている魚を食べて、あたる人もいました。永川さんはあたらないのだけれど」

「おしゃべりで、人が好き、お酒が好き、タバコが好き。何しろ博覧強記だから、話がものすごく面白い。でも、書くという行為には律儀といふか、完璧主義者で、書いて消してを繰り返すから前に進まない。出版社からしたら、締切に間に合わないどころか、いつ原稿ができるかわからない。生活はつましやかでした。普通以下のワインと安いタバコがあれば、満足なさっていた。翻訳した小説が世界文学全集や選集に入つ

たりして、印税で生活できたのだと思います」

佐伯はエッセイ集『惜櫻荘だより』（岩波書店）で、自分は永川を正面教師にしたと記している。永川を見ていて逆に、とにかく最後まで一気に書くということを覚えたというのだ。

「気に入らなければ、書き直せばいい。それでも駄目なら捨てる覚悟をするだけのことだ」

ただ、この執筆姿勢はワープロ書きに向いていて、ツールが文体を変えたのだと思うとも分析している。

永川は実にさまざまな相手と語り合う人だった。

「夜通し、英語、スペイン語、日本語、フランス語を駆使して議論している。白熱するところに限る。その後、出ていく人もいるし、かえつて仲良くなる者も多かつた。私は家族がいるし、写真撮影で早く起きたいし、先に寝ました。だから、大立ち回りを目にすることは、あまりありませんでした。でも、朝、起きると、食器が転がり、ワインの空瓶

が乱立している。永川さんが腕にけがをしていることもありました」

永川はみんなから「ティオ（おじさん）」と呼ばれた。佐伯の一人娘が「ティオ」と呼んだのがきつかけだった。夏になると一緒に旅をした。ヒッピーのような若者が歩いているとすぐに車を止めて、「おいでよ」と誘う。そのころ、世界を放浪している若者が多かつた。スペインのどこの街にも、ビートルズの歌が流れていた。

佐伯は永川から何を学んだのだろうか。

文章の書き方について自覺的になつたということはあるのではないかだろうか。「惜櫻荘だより」にはこんなふうに記している。

永川の教えは「漢字を多用するな」と「文章は形容詞から古びていく」だった。しかし佐伯は、「永川玲二の忠実な弟子たり得なかつた」という。

「劣等感のなせる業か、私の文章は漢字が多い、ついでに形容句も」

これを読んだ時、私は佐伯の作品群を思い返してみた。果たして、佐伯の小説に漢字や形容句は多かつただろうか。あまり意識して読んでいたかかった自分の読書を思う。佐伯のこなれた文章のせいかもしれない。それでは、永川の歴史観や文明論に影響を受けなかつたのだろうか。

佐伯は、

「話をしても、僕の方に永川さんの話に応えるだけの教養がなかつたので、あまり難しい話題で語り合うことはしませんでした。でも、一緒に旅をすると、その土地の文化や風俗のことを詳しく教えてくれる。あんなに知的なガイドはいないでしよう」

と思い出す。

そうは言うが、永川との交流は、佐伯のコスモポリタンな感覚を養うのに大いに貢献したように思えてならない。

佐伯の小説ではときどき、外国人が登場したり、海の向こうへの思いが語られる。江戸時代に外国との窓口だった長崎の登場回数も少なくないのではないだろうか。

日本列島の延長上にあるものや外にあるものが、小説世界を豊かにすること。これは佐伯文学の特徴を考える時の見逃せないポイントの一つだと思う。

(文中敬称略)